

P NEW JAPAN
HILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2024/2025シーズン

5

May, 2024



KAZUHIRO KOIZUMI



NAOTO OTOMO

2024/2025 シーズン
新日本フィルハーモニー交響楽団 5月演奏会

Contents

すみだクラシックへの扉 #23 小室敬幸	1
トリフォニーホール・シリーズ／サントリーホール・シリーズ #656 相場ひろ	7
楽員ストーリーズ ④① 渡辺 泰 (フルート&ピッコロ)	13
NJP from Inside	14
2024/2025シーズン 定期演奏会プログラム	16
NJP 6月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	23
お客様からの声	25
室内楽シリーズ	27
「バトロネージュ・システム」のご案内	34

■特別支援企業

オリックス
in 鹿島
CCC
大和証券
東京東信用金庫
NOMURA
フジサンケイグループ
三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業／団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

〈コンサートの感想をお寄せください〉

演奏会終了後1週間以内に回答いただいた方の中から、
抽選で10名様に新日本フィルオリジナルグッズをプレゼント！

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。
プレゼントの当選者にはメールにてご連絡させていただきます。
@njp.or.jpからのメールが受信できるようご設定
をお願いいたします。



<https://forms.gle/pgWSTF1gooyVLG9t8>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムでご紹介
させていただく可能性がございます。ご了承ください。

〈ご来場のお客様へのお願い〉



5.10 [金] 11 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第23回

2024年5月10日(金) 14時00分 すみだトリフォニーホール
5月11日(土) 14時00分 すみだトリフォニーホール

● ロッシーニ (1792-1868)

歌劇『セビリアの理髪師』より 序曲

Gioachino Rossini: Overture to "Il Barbiere di Siviglia"

前半 約40分

● エルガー (1857-1934)

愛の挨拶 op. 12 *

Edward Elgar: Salut d'amour, op. 12 *

● マスネ (1842-1912)

タイスの瞑想曲 *

Jules Massenet: Méditation de Thaïs *

● サン=サーンス (1835-1921)

序奏とロンド・カプリチオーソ イ短調 op. 28 *

Camille Saint-Saëns: Introduction et Rondo capriccioso en la mineur, op. 28 *

● サラサーテ (1844-1908)

ツィゴイネルワイゼン op. 20 *

Pablo de Sarasate: Zigeunerweisen, op. 20 *

—— 休憩20分 ——

● シャブリエ (1841-94)

狂詩曲「スペイン」

Emmanuel Chabrier: España, rapsodie pour orchestre

後半 約40分

● ラヴェル (1875-1937)

クーブランの墓

Maurice Ravel: Le tombeau de Couperin

I. プレリュード Prélude	II. フォルラーヌ Forlane	III. メヌエット Menuet	IV. リゴードン Rigaudon
----------------------	-----------------------	----------------------	-----------------------

● ラヴェル

ボレロ

Maurice Ravel: Boléro

[指揮] 大友直人

Naoto Otomo, Conductor

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

[ヴァイオリン] 前橋汀子 *

Teiko Maehashi, Violin *

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://forms.gle/pgWSTF1gooyVLG9t8>



Profile



©Rowland Kirishima

大友直人 [指揮] Naoto Otomo, Conductor

桐朋学園大学在学中にNHK交響楽団を指揮してデビュー以来、日本の音楽界をリードし続けている。

これまでに日本フィルハーモニー交響楽団正指揮者、大阪フィルハーモニー交響楽団専属指揮者、東京交響楽団常任指揮者、京都市交響楽団常任指揮者、群馬交響楽団音楽監督を歴任。現在は東京交響楽団名誉客演指揮者、京都市交響楽団桂冠指揮者、琉球交響楽団音楽監督、高崎芸術劇場芸術監督。

東京文化会館の初代音楽監督として東京音楽コンクールの基盤を築いたほか、海外オーケストラからも度々招かれており、ハワイ交響楽団には20年以上にわたり定期的に招かれている。小澤征爾、森正、秋山和慶、尾高忠明、岡部守弘らに学ぶ。NHK交響楽団指揮研究員時代にはW. サヴァリッシュ、G. ヴァント、F. ライトナー、H. ブロムシュテット、H. シュタインらに学び、タンゲルウッド・ミュージックセンターではL. バーンスタイン、A. プレヴィン、I. マルケヴィチからも指導を受けた。

大阪芸術大学教授、東邦音楽大学特任教授。京都市立芸術大学、洗足学園大学各客員教授。



©岡本隆史

前橋汀子 [ヴァイオリン] Teiko Maehashi, Violin

日本を代表する国際的ヴァイオリニストとして、その優雅さと円熟味あふれる演奏で、多くの聴衆を魅了し続けている。これまでにベルリン・フィルを始めとする世界一流の多くのアーティストとの共演を重ねてきた。近年、小品を中心とした親しみやすいプログラムによるリサイタルを全国各地で展開。一方、バッハ「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ&パルティータ」全曲演奏会や、ベートーヴェン「ヴァイオリンソナタ」全曲などにも取り組む。最新CDの秋山和慶指揮オーケストラ・アンサンブル金沢との『ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲二長調、ロマンス第2番へ長調』がレコード芸術特選盤に選出。著書『私のヴァイオリン 前橋汀子回想録』が早川書房より、最新刊『ヴァイオリニストの第五楽章』が日本経済新聞出版より出版されている。日本芸術院賞、紫綬褒章、旭日小綬章を受章。使用楽器は1736年製作のデル・ジェス・グアルネリウス。

Program Notes ●小室敬幸 [音楽ライター]

バロック時代にはイタリアからやってきたジャン=バティスト・リュリ(1632~87)が太陽王ルイ14世の寵愛を受けて、フランス音楽界の頂点に君臨したように、いつの時代もパリには国境を超えて音楽家が往来し、定住した。ロッシェニもイタリア出身だが、1824年にパリの劇場で音楽監督に就任し、晩年にもパリに住んだ。またスペインのサラサーテのように国外からパリ音楽院へ留学する音楽家も時代を追うごとに増えていく。

もちろんフランスに生まれた作曲家も周辺諸国と様々な関わりをもった。伝統あるローマ賞を獲った作曲家はイタリアに遊学したし、サン=サーンスはピアニストとして演奏旅行でまわった国や文化の要素を自作に取り入れている。ちなみにスペインを題材にしたフランス音楽が徐々に増えていくのは、ビゼーの歌劇『カルメン』(1875年初演)の頃からだ。

■ ロッシェニ：歌劇『セビリアの理髪師』より 序曲

人気続くオペラの名序曲 ▶

音楽家の両親をもつジョアキーノ・ロッシェニ(1792~1868)は1804年、12歳で音楽学校に入った。1812年、20歳で作曲した7作目のオペラによって早くも成功を収めており、早熟の天才といっていよう。また意外かもしれないが、若い頃からハイドンのオラトリオを演奏したりと、ウィーン古典派の巨匠にも大きな影響を受けている。

『セビリアの理髪師』は1816年にわずか2週間ほどで作曲され、2月20日に初演された。ただし序曲は、このオペラのために書き下ろされたものではなく、3年前にロッシェニが作曲した歌劇『パルミーラのアウレリアーノ』から転用されている。ロッシェニの没後、彼のオペラの多くが上演されなくなった時期も上演され続けた、名実ともに代表作である。

序奏付きで展開部のないソナタ形式となっており、比較的ゆったりとした導入のあと、弦楽器による軽やかだが暗い第1主題、オーボエが吹きはじめる明るい第2主題が続いてゆく……。

[楽器編成]フルート、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、大太鼓、シンバル、弦楽5部。

■ エルガー：愛の挨拶 op. 12

家族愛の結晶として ▶

ピアノの調律師を父に持つイギリスのエドワード・エルガー(1857~1934)は幼い頃から音楽に親しみ、ピアノとヴァイオリンを習った。だが経済的に余裕がなく、望んでいたドイツ留学は叶わず。1872年、15歳でやむなく事務仕事に就いた。しかしながら音楽への情熱が冷めやらず翌年には退職した。若い頃のエルガーにとって重要な稼ぎとなったのが楽器の指導だったのだが、1886年からピアノを教えはじめた名家の子女キャロライン・アリス・ロバーツと

徐々に惹かれ合う。1888年に婚約の印として贈られたのが「愛の挨拶」である。1889年5月8日、ふたりは無事に結婚。楽譜の献辞には「Carice=キャ(ロライン・ア)リス」と書かれているが、これは1890年8月に生まれた娘の名前になった。

■ マスネ：タイスの瞑想曲

タイスの改心の
場面の音楽

11歳でパリ音楽院に入り、20歳でローマ賞を獲ったジュール・マスネ(1842~1912)は、歌劇の創作に生涯を費やしたフランスの作曲家。『マノン』(1884年初演)、『ウェルテル』(1892年初演)と並ぶ、代表的なオペラとなったのが『タイス』(1894年初演)だ。アナトール・フランス(1844~1924)による同名小説が原作で、4世紀のエジプトが舞台だ。愛する遊女タイスの生き方を改めさせようと、修道僧アタナエルが悩みながら奮闘する悲劇である。ヴァイオリン独奏と管弦楽(オペラでは合唱も加わる)による「タイスの瞑想曲」は、このオペラの第2幕 第1~2場のあいだに置かれた間奏曲。この曲を通して遊女タイスは自らの考えを変えてゆく。

■ サン=サーンス：序奏とロンド・カプリチオーソ イ短調 op. 28

名手サラサーテの
ために作曲

生まれたばかりの頃に父が亡くなってしまったため、貧しい家庭で育ったカミーユ・サン=サーンス(1835~1921)。しかし母の願いで2歳からピアノを弾き出し、3歳5ヶ月で初めての作品を書いた。まごうことなき神童である。若い頃を除けば教職に就かず、生涯の大部分をピアニストとして世界各地を演奏旅行でまわり、滞在先で出会った異国の音楽をしばしば取り入れた。本作は名ヴァイオリニストのサラサーテのために1863年に書かれ、彼の祖国であるスペインの要素を含んでいる。ゆったりとした序奏の後、テンポアップしたところからが主部。タイトルの通り、ゆったりとした序奏に続く主部はロンド形式になっており、気まぐれに(=カプリチオーソ)曲想を次々と変えてゆく。

■ サラサーテ：ツィゴイネルワイゼン op. 20

ロマの音楽の特徴を
取り入れ

スペイン出身のパブロ・デ・サラサーテ(1844~1908)もヴァイオリンの神童として才覚をあらわし、12歳でパリ音楽院に留学。16歳頃にはプロの演奏家としてデビューして、世界中を演奏旅行で巡った。作曲家として母国の要素を取り入れたものもあるが、「ツィゴイネルワイゼン」は独語で「ジプシーの旋律」を意味しているように、当時は定住せずに流浪の生活をしていたロマの音楽を模した作品だ。あまりにも有名な序奏ではじまった後、ラッサンと呼ばれる遅い部分、次いでフリスカと呼ばれる速い部分が続いていく。

[(以上4曲の最大) 楽器編成] ヴァイオリン独奏、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、トライアングル、ハーブ、弦楽5部。

スペイン滞在の
感動を音に

■ シャブリエ：狂詩曲「スペイン」

フランスのエマニュエル・シャブリエ(1841~94)もまた幼少の頃からピアノの才能を発揮したが、実父の反対で法律を学び、1861年から内務省に勤務した。しかし音楽の道を諦めきれず、働きながら勉強と作曲を続けた。1876年にはフランクらが立ち上げた国民音楽協会に入り、1880年には内務省を辞めて音楽に専念することに。その2年後、秋にスペインを訪れた際の感動を、愉悅に満ちたリズムとメロディ、そして色彩的なハーモニーとオーケストレーションで描いたのが本作である。

■ ラヴェル：クーブランの墓

戦死した友に
捧げた佳作

両親は音楽家でこそなかったが、モーリス・ラヴェル(1875~1937)は音楽好きの父(スイス国籍だが血筋はフランス)からの影響で自然と音楽に興味をもち、12歳から作曲を学びだす。しかし30歳までローマ賞に挑戦し続けたものの、大賞を獲れなかった苦労人でもあった。

年齢が30代なかばに差し掛かった1910年代にもなると、ラヴェルはフランスを代表する気鋭の作曲家とみられるようになっていた。1917年、第一次世界大戦のさなかにまず全6曲のピアノ曲として完成した「クーブランの墓」は、バロック時代のチェンバロ奏者・作曲家フランソワ・クーブラン(1668~1733)に象徴される18世紀のフランス音楽に敬意を表し、各曲が戦死した友人へ捧げられた作品だ。管弦楽版はそのうち4曲を抜粋してラヴェル自身が編曲している。

[(以上2曲の最大) 楽器編成] フルート2(ピッコロ持替)、ピッコロ、オーボエ2(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、太太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タンバリン、ハーブ2、弦楽5部。

■ ラヴェル：ボレロ

シンプルな素材
からの豊穡な世界

ラヴェルも彼の実母もスペインのバスク出身。ラヴェル自身は生後3ヶ月でパリへと引っ越してしまっただが、母の歌うスペインの民謡を聴いて育ったという。その生涯でスペイン絡みの作品を何曲も残しているのは、そうしたバックグラウンド故なのだろう。なかでもロシアのダンサー、イダ・ルビンシュタインから委嘱された本作(1928)はラヴェル作品のなかで最も有名なものとなった。当初はスペインの作曲家アルベニスのピアノ曲にオーケストレーションを施してバレエ音楽に仕立てるという依頼だったが、その編曲権はスペインの指揮者にあった。権利をラヴェルに譲渡してくれるという話になったが、最終的に新作を新たに書き下ろしたことで『ボレロ』は生まれた。たった2小節のリズムを繰り返す上で、2種類の旋律が入れ替わってゆくだけなのだが、豊かなオーケストレーションによって飽きさせない。

[楽器編成] フルート2(ピッコロ持替)、ピッコロ、オーボエ2(オーボエダモーレ持替)、イングリッシュホルン、クラリネット2(Es管持替)、バスクラリネット、ソプラノサクソフォン、テナーサクソフォン、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、ピッコロトランペット、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、太太鼓、小太鼓2、シンバル、タムタム、ハーブ、チェレスタ、弦楽5部。

未来に、社会に。 豊かさを。

オリックスグループは「豊かな社会」を実現するために、
社会福祉、青少年の育成、環境保全などの分野で支援活動を行っています。



「SANGO ORIX」として、沖縄サンゴ礁移植支援活動を推進しています。



児童養護施設などの子どもたちを、オリックス・バファローズの野球観戦にご招待しています。



世代を超えて地域の人々が子どもに食事や居場所を提供する「子ども食堂」への支援を行っています。



全国の肢体不自由児施設などに、車椅子でそのまま乗車できる福祉車両や送迎用の車両を寄贈しています。



©K.Miura



オリックス

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2024-2025 Season
#656

5.18 [土]
トリフォニーホール・シリーズ
新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第656回定期演奏会
2024年5月18日(土) 14時00分
すみだトリフォニーホール

5.19 [日]
サントリーホール・シリーズ
新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第656回定期演奏会
2024年5月19日(日) 14時00分
サントリーホール

●ベートーヴェン (1770-1827)

交響曲第8番 へ長調 op.93

約30分

Ludwig van Beethoven: Symphony No.8 in F major, op.93

- I. Allegro vivace e con brio
- II. Allegretto scherzando
- III. Tempo di Menuetto
- IV. Allegro vivace

—— 休憩20分 ——

●チャイコフスキー (1840-93)

交響曲第4番 へ短調 op.36

約45分

Pyotr Il'yich Tchaikovsky: Symphony No.4 in F minor, op.36

- I. Andante sostenuto – Moderato con anima
- II. Andantino in modo di canzona
- III. Scherzo: Pizzicato ostinato: Allegro
- IV. Finale: Allegro con fuoco

[指揮] 小泉和裕

Kazuhiro Koizumi, Conductor

[コンサートマスター] 伝田正秀

Masahide Denda, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

演奏会アンケートは
こちらから

<https://forms.gle/pgWSTF1gooyVLG9t8>



- 主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 共催：すみだトリフォニーホール [5/18公演]
- 助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。



Profile



© Ivan Malý

小泉和裕 [指揮] Kazuhiro Koizumi, Conductor

東京藝術大学指揮科に入学、山田一雄氏に師事。1970年
民音指揮者コンクール第1位受賞。

1972年7月新日本フィル創立に際し、指揮者として参加。
同年ベルリンのホッホシューレに入学し、ラーベンシュタイン
教授にオペラ指揮法を師事。

1973年カラヤン国際指揮者コンクールに第1位入賞。その
後ベルリン・フィルを指揮してベルリン・デビューを飾った。

1975～79年新日本フィル音楽監督を務める傍ら、1975年
ベルリン・フィル定期演奏会に登場、1976年フランス国立
放送管を指揮しルービンシュタイン、ロストロポーヴィチとも
協演、同年ザルツブルク音楽祭でウィーン・フィルを指揮、そ
の後もミュンヘン・フィル、バイエルン放送響など、ヨーロッ
パ各地において精力的な指揮活動を行った。またアメリカに
おいても、1978年ラヴィニア音楽祭でシカゴ響を指揮し大
成功を収めた後、1980年シカゴ響定期公演に登場し注目
を集めた。その他、ボストン響、デトロイト響、シンシナティ
響、トロント響、モントリオール響などにも客演。

1983～89年カナダのウィニペグ響音楽監督、1986～89
年都響の指揮者を歴任。ロンドンのロイヤル・フィルには
1988年より定期的に招かれ、数々の名演を残すとともに
チャイコフスキーの交響曲第4、5、6番およびマンフレッド交
響曲のディスクを完成させた。

1989～96年九響首席指揮者、1992～95年大阪センチュ
リー響首席客演指揮者、1995～98年都響首席指揮者、
1998～2008年都響首席客演指揮者、2003～08年大阪
センチュリー響首席指揮者、2008～13年都響レジデント・
コンダクターおよび日本センチュリー響音楽監督、2006～
18年仙台フィル首席客演指揮者、2013年～24年九響音
楽監督、2016～23年名古屋フィル音楽監督を歴任。

現在、都響終身名誉指揮者、九響終身名誉音楽監督、名古
屋フィル名誉音楽監督、神奈川フィル特別客演指揮者。21
年12月、自身の半生をつづった『邂逅の紡ぐハーモニー』が
中経マイウェイ新書から出版された。

Program Notes ● 相場ひろ [音楽評論]

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンとピョートル・チャイコフスキーの
作品を並べてみると、今さらながらにふたりの資質の違いを感じざるを
得ない。どちらの方が偉大だったとか、どこの国の生まれだとかというこ
とではない。作曲家としてのありようの問題だ。

ベートーヴェンは言ってみれば集中力の人だ。ひとつの旋律があれば、
それを小さく分解し、その分解した破片のそれぞれが持つ可能性を余す
ところなく汲み尽くそうとひねくり回し、探求の手を休めない。その結果
として延々と積み重なる変奏だったり、いつまでも終わらないコードだっ
たり、ときに音楽がひたすら饒舌に、冗長になることがあるけれども、そ
れでいて無駄がない。というよりも、ベートーヴェン自身が没入しきって
いて、目の前の音楽以外の事柄が視野にまったく入ってこないかのようだ。

他方、チャイコフスキーは本質的にサービス精神旺盛である。人なつ
こい旋律をあちこちに置いて聴き手を手招きし、寄り道をさせることを忘
れない。6曲の交響曲を残したうち、最初の3曲は次第に寄り道をする
ことの方が本業のようになってしまった。チャイコフスキー本人も少々ま
ずいと思ったのだろう、寄り道の部分を別に集めて交響曲から切り離し、
交響曲はもっと人生の本質的なものを、生きることの難しさや希望や絶
望を語る器として磨き上げた。その結果が後半3曲の交響曲と、それら
の合間に書かれた4曲の管弦楽組曲である。しかしながら、気がつけば
交響曲にも、ワルツや行進曲やら、それぞれに気の利いた寄り道が添
えられた。甘い旋律もたっぷり、気がつくときと深刻な話の本筋から逸れ
かける。それが悪いというのではない。おそらくは一種の韜晦で、そう
した仕草を通じて彼は彼なりに問題を深めていくのだ。

ベートーヴェンの作品中軽いものとみなされがちな交響曲第8番と、
チャイコフスキーの交響曲中でも引き締まった構成で評価の高い交響
曲第4番と、このふたつを並べてお互いを見比べると、そうした性格の
違いがことさらに際立つように思える。

■ ベートーヴェン：交響曲第8番 ヘ長調 op. 93

7番と並行して作曲 ▶

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)の交響曲第8番 ヘ
長調 op. 93は、交響曲第7番イ長調 op. 92と並行して書かれた。その最
初のスケッチは第7番に先んじて1811年末頃に書き始められたが、作曲
作業が本格化するのは第7番が翌年5月頃に完成して後のことで、第8番

が完成したと自筆譜にメモがあるのは同年10月、滞在先のリンツでのことだった。初演は1814年2月27日、ウィーンのレドゥーテンザールで行われた。このときには前年に初演された交響曲第7番と共に演奏されている。

古典的構成と
オリジナリティ

この交響曲は長大な楽章を持たないために、ベートーヴェンとしては規模が小さく、また舞曲楽章に交響曲第1番以来となるメヌエットを置いたことで、ヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)やヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)の時代の古典派的な交響曲に先祖返りしたものとみなされることが多い。それでいてこの短い作品においても、彼のオリジナリティは存分に発揮されている。

曲の構成と
音楽の特徴

第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ・エ・コン・プリオ：いっさいの序奏なく第1主題の提示で幕を開ける。快活で喜ばしい気分にあふれた音楽であるが、第2主題がヘ長調の第1主題から遠いニ長調で始まるなど、調性的に不安定な動きが連続してあらわれるのが興味深い。第1主題による展開部の後、定型通りの再現部が置かれ、さらに第1主題を中心とする第2展開部へと続いてコーダを迎える。

第2楽章 アレグレット・スケルツァンド：「スケルツァンド」は舞曲としての名称ではなく、「諧謔味を込めて」という本来のイタリア語の意味で用いていると考えるべきだろう。形式的には展開部のないソナタ形式で、第1主題はメトロノームの発明者として知られる友人のヨハン・メルツェルにあてたカノンからとられたという説がかつてあったが、実際のところカノンはベートーヴェンの秘書を務めたアントン・シンドラーによる後年の偽作であり、こんにちでは否定されている。

第3楽章 テンポ・ディ・メヌエット：交響曲第1番の舞曲楽章は「メヌエット」と題されながらも内容的にはスケルツォとみなされるので、この楽章がベートーヴェンの交響曲中唯一の真正なメヌエットと言える。いくぶん武骨なリズムとカラフルな色彩が鄙びた雰囲気をもたらすメヌエット主部に対し、トリオはホルンの活躍が印象深い。

第4楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ：強い推進力を持つフィナーレで、ソナタ形式によるが、再現部の後の第2展開部が長大で、コーダと合わせて楽章のほぼ半分を占める。テンポ、強弱、及び調性的なメリハリが明確なことが、楽章の性格を決定づけている。

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

■ チャイコフスキー：交響曲第4番 ヘ短調 op. 36

経済的基盤を得て ▶

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840~93)は1877年から、富豪の未亡人であったナジェンダ・フォン・メック夫人から金銭援助を受け、以後14年にわたって経済的な不安に心奪われることなく作曲に打ち込めるようになった。交響曲第4番 ヘ短調 op. 36は歌劇『エフゲニー・オネーギン』と並んで、彼女の援助を支えに生まれた最初の成果のひとつである。同年初めに書き始めた交響曲は年末から翌年年初にかけて完成に至り、1878年2月10日(新暦では22日)にサンクトペテルブルクで、ニコライ・ルビンシテイン指揮によって行われ、大きな成功を収めた。

作曲家による標題と
音楽の特徴 ▶

この交響曲についてはチャイコフスキー自身が標題音楽であることをフォン・メック夫人への書簡で明らかにしている。

第1楽章 アンダンテ・ソステヌート〜モデラート・コン・アニマ：作曲家自身によれば「序奏は交響曲全体の萌芽」である。冒頭で示されるファンファーレ風の動機は「運命」の動機と呼ばれ、全曲を統一する役割を果たすと同時に、「運命への抗い」という標題をその扱われ方を通じて表現する。長大なソナタ形式による主部は、焦燥感を帯びた第1主題と夢想的な第2主題に「運命」動機がからんでドラマチックな展開をみせる。

第2楽章 アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ：3部形式であり、主部は仄暗い旋律がオーボエ独奏に始まって歌い継がれていく。中間部はややリズムミカルな曲想が登場し、その後主部が大きく変容したかたちで回想される。

第3楽章 スケルツォ(ピッツィカート・オスティナート)：間奏曲的な性格の楽章で、全体を通じて弦楽器はピッツィカートのみを用いる。主部はその弦楽器を中心に、中間部はピッコロをはじめとする木管楽器が活躍する。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ：「民衆の集まる祭りの描写である。しかし我が身の悩みを忘れ、他者の幸福に心奪われると、仮借なき運命が舞い戻ってくる。」輝かしいフィナーレは紆余曲折を経て「運命」動機に脅かされるも「それでも他人の喜びを喜びなさい」とチャイコフスキーは述べる。力強いクライマックスと共に全曲は閉じられる。

[楽器編成] フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、弦楽5部。